

学校評価考察

令和5年度

1. 小学校児童対象アンケート結果について

(1) 自分の生活について

質問6の項目で「あまりそう思わない」と答えた児童がいることについて改善点を考えた。少人数の中、児童一人一人が主体的に考えられるような題材の設定、授業の展開を実践する。教員の人権意識を高め、もっと研修を積んでいかなければならないのではないかと考えた。

(2) 自分の生活について

質問4の項目で「あまりそう思わない」と答えた児童がいることについて改善点を考えた。
・あいさつは学校内や決まった場所で行うことはできるが、地域の中ではできていないということもある。教員がお手本を示していくことや声かけを行っていくことで改善できるのではないかと考えた。

2. 中学校生徒対象アンケートについて

「4 忘れ物をしないで学校へ来ている」がCである。生徒数が少ないので、下校時や朝の会などで忘れ物がないようにチェックできている。個別に対応できているが、生徒の意識は「あまりそう思わない」の項目なので、引き続き声かけを行い、家庭への協力をお願いする。「12 先生は分かりやすい授業をしてくれる」がA50%、B50%であるにもかかわらず、「13 今、学習していることはよく分かる」がBであることに注目した。授業内容は理解できているが、学力に結びついていないことが反省点である。学力検査の内容も、思考力を問われるものが増えてきている。教員の授業力向上とICTを活用した分かりやすい授業に努める。

3. 保護者対象アンケートについて

「1 保護者や地域と一体となり教育活動を行おうとしている」地域行事への参加について、学校や教員にもっと前面に出てきて欲しいという意見がある。やり方によっては働き方改革と逆行するが、地域に出向いて「ああでもない、こうでもない」という機会をもつ中で前進する姿を欲していると思う。コロナ禍ではできない動きであり、今後以前の動きのどこまで元に戻せるか、押しはかりながらやっていくしかないのかもしれない。

家庭での姿だけでは伝わらないところをどう伝えるか考えていくことが大切。「伊座利校だより」は、これまでやってきたこと、それ以上の見える化や表し方がいるのかもしれない。子ども達のために何ができるのか、手間ひまをかけることを惜しまない集団であって欲しい。

「16 本校の子どもたちは、学年に応じた学力がついている」の結果を受け、保護者との細かな連絡に取り組んできた。（懇談の時に相談があったことについて、できるようになったことなど）その取り組みを全教員でより充実させる。テストの点では計れない、力がついているところを伝える。教員は児童生徒が分かりやすい授業を工夫し、少人数の良さをいか

した授業を展開する。中学校は授業をより分かりやすいように工夫する必要がある。クイズを出し合う・問題作り(kahoot:クイズを作成し、オンラインでつながって回答できるアプリ)各教科で工夫して使えるのではないかな。

「13 気持ちのよい挨拶をしている」決められている場面ではできている。(朝、職員室に来たとき)あいさつは、学校の中で、職員室でするものと思っているのではないかな。まずは学校で、意識・認識を改めていく。知識や心情的なことを勉強させて行動を変えるのは難しい。教師の真似をさせるのが一番。朝ろうかですれ違うときなど、教師がもっと大胆に手本となる姿を見せていく。PBSの取り組みとして、よいあいさつを褒め、望ましいあいさつが増えていることを視覚的に分かるように支援する。コミュニケーションのツールとして挨拶は大事だと伝える。できているときは褒める。

「19 部活動の練習に積極的に取り組んだ」試合に勝つことが意欲につながるのではないかな。試合に勝つために技術を磨くのがいいが、人数が少ないので動画を使って確認させる。

「20 お子さんは夢や希望の実現に向けて努力している」生徒の態度をみて変化するものであるので、生徒自身が変わっていくことができるように取り組む。将来像を考える機会をつくらなければならない。

4. 教職員対象アンケート結果について

- ・全職員で足並みをそろえて教育活動に取り組むために、年度始職員会で学校教育目標を共通理解し、方針を統一する。
- ・学校運営に教職員の意見を反映し、こまめな情報交換をするために、終礼や職員朝会、職員会で発言し合うことのできる状況を作る。
- ・学習方法を工夫・改善するために、教師の一方的な教え込みにならず、子どもの主体的な学びとなるよう常に意識し、実践する。また、振り返りを重視する等、評価の工夫をする。
- ・「徳島県 GIGA スクール構想」の取り組みとして、授業体制の構築(タブレットの持ち帰り)や授業における ICT の活用についての研修を推進する。
- ・SDGsに関する内容を様々な教科と絡ませながら考えさせていく。(総合的な学習の時間における ESD の展開)

5. 次年度に向けて

(1) 学習指導

- ・学力向上のために、学習規律の徹底から細かいルールづくり等、学習環境(授業のユニバーサルデザイン化)を整えることが大切である。また、授業研究会を実施し、授業の進め方等を共通理解するとともに、授業の導入・展開・結びのポイントを整理し、全教職員が一様に実践する。
- ・児童生徒の主体性や思考力を育むために、授業での話し合いの場面設定を工夫する。→児童生徒同士の相互評価を行い、深い学びへと繋げていく。

(2) 児童生徒指導, 児童生徒理解

- ・児童生徒の様子について、全教職員で情報を共有したり、相談できる時間を確保したりする。そのために、毎月の職員会や終礼の中に情報共有の時間を明確に位置づける。

- ・教師主導ではなく、児童生徒の自己有用感を高められる指導を行うために、ポジティブな行動支援を充実させ、一人一人の良いところを全教職員が共有する。
- ・「不祥事根絶対策タスクフォースからの『提案』」における学習指導や生徒指導での「してはいけないこと」及び自校における「配慮すること」についての具体的な取り組みを再確認する。

(3)研修の充実

- ・校務支援システムやタブレットの活用、プログラミング学習の充実に向けた研修を継続推進していく。
- ・教科指導に関する基礎的、基本的な研修を行う。→メンター制の活用
- ・外部講師を招いて特別支援教育についての研修を行う。

(4)教職員の協働

- ・小中の連携、全教職員の共通理解ができるように、職朝、終礼、研修を活用する。また、行事が追加や変更された場合などは、確実に全教職員が把握できるよう徹底する。→校務支援システム、Teams 等の掲示版としての活用。

(5)地域・保護者との連携・協働

- ・コミュニティスクールとして、学校、地域、保護者が連携・協働できるように、地域と共に行う教育活動に重点を置いた学校運営を行う。また、学校と地域の連携を生かす、深めるためにも積極的にコミュニケーションを図る。

(6)業務改善等、働き方改革の推進

- ・各自の業務内容、時間等を可視化し、業務の効率化を図るとともに教職員の業務の負担の平準化へとつなげていくため、グループウェアを活用した客観的なスケジュール管理を行っていく。→タイムマネジメントの推奨